



## 神様を信じる力

5月3日4日5日と津和野への徒歩巡礼に行ってきました。

命をかけて信仰を生きた人たちの足跡をたどって、少しでもそれにあやかりとうする2泊3日の旅です。

この巡礼の期間中に思い出したことがあります。

それはまだ私が大学生のころの話です。

頼まれて何人かの子供たちに神様の話をしていました。

「神様がこの世界を創られた」。

聞いている子供の中に「この世界は大きな爆発によって偶然できた」と言った子がいたので大学生の私は因果律を使って一生懸命説明していました。

が、一人の女の子が「神様を信じないっておかしいんじゃない」と言ったことで他の子供たちも「そうだそうだ」ということになり、私の説明は意味がなくなりました。

一人の神様を信じているあるいは感じている人の証言には力があるなと思ったことでした。

## 神の家族としての教会

今日は、第二バチカン公会議が教会を定義したもう一つの用語、すなわち「神の民」について簡単に考えてみたいと思います(『教会憲章』9、『カトリック教会のカテキズム』782参照)。だれもが考察しうる、いくつかの問いを用います。

1 「神の民」であるとは、いかなることでしょうか。第一の意味はこれで

す。神は、固有の意味では、特定の民に属しているわけではありません。なぜなら、神はわたしたちに呼びかけ、わたしたちを呼び集め、ご自分の民の一員となるよう招くからです。この招きは分け隔てなくすべての人に向けられています。なぜなら、神のあわれみは「すべての人が救われることを望んでおられる」(一テモテ2・4)からです。イエスは使徒たちに、またわたしたちに、排他的なグループ、すなわち「エリート」のグループになれといわれたわけではありません。イエスはいわれます。行って、すべての民を弟子にしてください(マタイ28・19参照)。聖パウロはこう述べます。神の民においても、教会においても、「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人も……ありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです」(ガラテヤ3・28)。自分が神と教会から遠ざかっていると考えている人、恐れている人や無関心な人、自分がもはや変われないと考えている人——これらの人に申し上げたいと思います。主はあなたがたもご自分の民に加わるよう招いておられます。それも深い尊敬と愛をもって。神はわたしたちがこの民、すなわち神の民に加わるよう招いておられるのです。

2 人はどのようにしてこの神の民の一員となるのでしょうか。身体的な誕生によるのではなく、新たな誕生によってです。福音書の中で、イエスはニコデモにいわれます。人は上から、すなわち水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない(ヨハネ3・3-5参照)。また洗礼によってです。洗礼はわたしたちを神の国へと導き入れるからです。そして神のたまものである、キリストへの信仰によってです。わたしたちは生涯全体を通じてこの信仰を養い、成長させなければなりません。わたしたちは自らに問いかけなければなりません。わたしは、洗礼によって受けた信仰をどれ

ほど成長させているだろうか。わたしが受け、神の民が抱いているこの信仰を、わたしはどれほど成長させているだろうか。

(中略)

5 神の民の目指す目的は何でしょうか。目的は、神の国です。神の国は、神ご自身によって地上で始まりました。そしてそれを、わたしたちのいのちであるキリストが現れる完成の時まで、拡大していかなければなりません(『教会憲章』9参照)。

(中略)

親愛なる兄弟姉妹の皆様。御父の偉大な愛の計画に従って、神の民となることです。わたしたちの世に神の救いを告げ知らせ、もたらすことです。世はしばしば道に迷っています。そして、励まし、希望を与え、新たな歩む力を与えてくれるこたえを必要としています。教会が神のあわれみと希望の場となることができますように。すべての人がこの教会という場で、受け入れられ、愛され、ゆるされ、福音の幸いな生活を生きるよう励まされていると感ずることができるよう。人が受け入れられ、愛され、ゆるされ、励まされていると感ずることができるために、教会は門を開いていなければなりません。すべての人が入れるためです。わたしたちも門から出て、福音を告げ知らせなければなりません。

教皇フランシスコの12回目の一般謁見演説「神の民としての教会」(一部抜粋)

(カトリック中央協議会 訳)

## 教会暦

05月02日 聖アタナシオ司教教会博士(記念日)  
05月03日 聖フィリポ 聖ヤコブ使徒(祝日)  
05月26日 聖フィリポ・ネリ司祭(記念日)  
05月28日 主の昇天(祭日)  
05月31日 聖母の訪問(祝日)

(ホームページ)

